令和６年１１月６日（水）長崎新聞

県高校駅伝

男子　女子

鎮西学院 V 諫早

第76回県高校駅伝大会は５日、諫早市の県立総合運動公園周回コースで行われ、男子は鎮西学院が２年連続、女子は諫早が６年連続で優勝を飾った。ガッツポーズでゴールする鎮西学院のアンカー内田（左）と諫早のアンカー森田
（西本翔撮影）【記事は14面】

県高校駅伝

諫早 区間賞４で６連覇

全中３位増丸 本領発揮

女子第２中継所、諫早の３区増丸（右）が２区高瀬からたすきを受けて走り出す　＝県立総合運動公園周回コース（西本翔撮影）

第76回県高校駅伝大会は5日、諫早市の県立総合運動公園周回コース（男子7区間42・2キロ、女子5区間21・1キロ）で行われ、女子は諫早が1時間11分23秒で6年連続30度目、男子は鎮西学院が2時間9分25秒で2年連続17度目の優勝を飾った。

1日に雲仙市発着の公道コースで実施予定だったが、天候不良のため延期。会場も運動公園内の周回コースに変更して実施した。

女子の諫早は1区糸瀬が五島の松本と30秒差の2位でスタート。2区高瀬が区間賞の好走で首位に立つと、その後も増丸、宮本、森田の連続区間賞で後続を引き離した。アンカーで逆転した瓊浦が2位、長崎商が3位に続いた。

男子の鎮西学院は中盤以降から独走。1区牟田颯、2区百田の連続区間賞で発進した後、3区終了時点で長崎日大に7秒差まで迫られたが、4区牟田凜が再び差を広げ、6区武石、7区内田の区間賞でつないだ。3区松本、5区武末が区間賞を獲得した長崎日大が過去最高の2位入賞。瓊浦が3位に入った。

男女とも優勝校は全国大会（12月22日・京都市）、上位各3校は九州大会（11月16日・宮崎県西都市）に出場する。全国大会は今年から出場枠が増加。各都道府県代表の47校に加え、各地区大会1位校に出場権が与えられる。このため、男子の長崎日大と瓊浦、女子の瓊浦と長崎商は全国切符獲得の可能性が残っている。（城谷桜子）

男子成績

①鎮西学院　２時間９分25秒
（牟田颯、百田、山本、牟田凜、柴山、武石、内田）

②長崎日大　２時間12分26秒
（黒岩、俵、松本、水上、武末、吉田、本多）

③瓊　浦　２時間13分25秒
（真崎、鶴田、黒岩、有村、山口、田中、中）

④創成館２時間16分３秒⑤九州文化学園２時間17分34秒⑥諫早２時間18分52秒⑦五島２時間20分44秒⑧長崎北陽台２時間21分16秒⑨大村工２時間22分59秒⑩佐世保工２時間24分43秒⑪諫早農⑫青雲⑬壱岐⑭長崎西⑮清峰⑯佐世保北⑰大村⑱西陵⑲川棚⑳長崎総合科学大付㉑壱岐商㉒対馬㉓島原㉔上五島㉕西海学園㉖鹿町工㉗島原工㉘口加㉙小浜㉚佐世保西

区間１位記録

▽１区	牟田　颯太	（鎮西学院）	30分41秒
▽２区	百田　好希	（鎮西学院）	８分47秒
▽３区	松本　快斗	（長崎日大）	24分42秒
▽４区	牟田　凜太	（鎮西学院）	25分18秒
▽５区	武末　健悟	（長崎日大）	８分46秒
▽６区	武石　兼信	（鎮西学院）	15分20秒
▽７区	内田　涼太	（鎮西学院）	15分23秒

区間距離▽１区＝10キロ▽２区＝３キロ▽３区＝8.1キロ▽４区＝8.1キロ▽５区＝３キロ▽６区＝５キロ▽７区＝５キロ

女子成績

①諫　早　１時間11分23秒
（糸瀬、高瀬、増丸、宮本、森田）

②瓊　浦　１時間16分58秒
（川原、久保、原、前尾、松尾）

③長崎商　１時間17分７秒
（船木、白下、宮本、植嶋、深江）

④口加１時間18分19秒⑤長崎日大１時間18分31秒⑥鎮西学院１時間18分37秒⑦創成館１時間19分58秒⑧五島１時間21分44秒⑨長崎北陽台１時間27分53秒⑩佐世保西１時間28分20秒⑪上五島⑫大村⑬清峰⑭佐世保商⑮佐世保北

区間１位記録

▽１区	松本　唯香	（五　島）	20分41秒
▽２区	高瀬　詩織	（諫　早）	13分32秒
▽３区	増丸　奈央	（諫　早）	９分46秒
▽４区	宮本さくら	（諫　早）	10分21秒
▽５区	森田そよ香	（諫　早）	16分33秒

区間距離▽１区＝６キロ▽２区＝4.1キロ▽３区＝３キロ▽４区＝３キロ▽５区＝５キロ

女子

【評】諫早が２区から４連続区間賞で快勝した。先頭を走る五島と30秒差の２位でたすきを受けた２区高瀬は１キロを待たずにトップへ。以降も各区間で大きくリードを広げた。

２位瓊浦は１区川原が３位発進。２区で４位に後退したが、そこから５区松尾の区間２位などで着実に順位を上げた。３位長崎商は１区６位の出遅れから、総合力で九州大会の出場権をつかんだ。

４位口加は全員が区間４～６位と安定していた。長崎日大が過去最高の５位と健闘。８位五島は１区松本が区間賞でけん引した。

ヒロイン

「全中銅メダリスト」が最後の冬に向けて調子を上げてきた。女子3区で区間賞を獲得した諫早の増丸は、夏以降に3000㍍で自己新を連発。この日も「ぼてずに3キロを走り通せた」と1人で1分以上の貯金をつくり、早々とチームの6連覇を決定づけた。

持ち前の力強さに加えて、今は軽快さがある。全校応援の後押しを受けて、1キロ3分10秒を切るハイペースで通過。以前までの失速癖もなくなり、一人旅の展開でもペースダウンを抑えた。

大村中3年時の全国中学大会800㍍で3位に入った逸材は、高校で苦しんだ。6位までがインターハイに進める北九州地区予選で3年連続7位。2、3年時は1500㍍でも7位に終わった。どうしてもスタミナが持たない。「トラウマでスタートに立っても自信が持てなくなっていた」

転機はこの夏。大学から声がかかり、競技継続を決めたことで自覚が芽生えた。もともとトライアスロンの選手で、高校入学後も盆と正月はプールで泳いでいたが「中途半端になりたくない」と未練を断った。夏合宿で昨年の倍近い1日30キロを走破してスタミナ不足を克服し、10月に3000㍍で9分32秒台をマーク。昨夏から20秒以上縮め、チームの柱へと成長した。

都大路では、レース中盤に勢いをつける「ゲームチェンジャー」の役割が求められる。「たすきをもらった時点よりも順位を上げるつもり」。チームも自らも3年ぶりの全国入賞へ。本領を発揮してきた身長169センチのスピードランナーは、日本一を決める高速レースにも順応できるポテンシャルを秘めている。（中島宙）